

ロボスト技術の可能性説明

北大、都内で初の「研究会」



最先端の研究シーズが紹介された都内初開催のロボスト研究会

もろう試みの第1弾として、初めて東京で開いた。

この日は4つの研究事例を発表。このうち北大農学研究院の松浦英幸教授（帯広柏葉高校卒）は、「バレイシヨ（ジヤガイモ）プロジェクト」を発表。ビール醸造過程で発生する酵母おりを活用した、ジヤガイモの増産効果の実証について説明した。

最後に、北大大学院の瀬戸口剛副工学研究院長が、ロボスト研究会の今後の展開を紹介。研究シーズの蓄積から環境整備、共同研究、知財管理、人材育成と5段階での発展を考えており「出口を教えていただく」と、研究の社会実装化が見えてくる」などと、産学官の連携を広く訴えた。

北大は17年5月に同研究会を設立。生産者や自治体、他大学、公的機関、企業などが北大を中心にクラスター形成を進めることで、北海道版フードバレーの構築を目指している。

（植木康則）

北海道大学は、農林水産工業を中心を活用が可能と考えられる最先端の研究シーズを集めた「ロボスト（強靱いきようじんしき）農林水産工学科学技術先導研究会」を10日、都内で開催した。都内の企業や金融機関、研究機関、行政などから集まった85人に、事例を紹介しながら現場での活

用や共同研究の可能性などについてアピールした。

北大では、持続可能性社会の実現に向けた世界トップレベルの研究推進・社会実装を実現するため、今年度から「ロボスト農林水産工学国際連携研究教育拠点構想」をスタートさせた。今回、これらの存在と活動内容を全国に知って